



地域の底力——兵庫県丹波篠山市

人々の日常に溶け込む城下町と 農村の伝統があらたな価値を生む 兵庫県丹波篠山市

地元では当たり前の景色や暮らしが、
未来を切り拓く資産になり得る。
丹波の黒豆やデカンショ節で知られる
兵庫県丹波篠山市では今、
人々の意識がゆっくり変わりつつある。

1609年(慶長14)に築かれた丹波篠山城跡を要とする、兵庫県丹波篠山市の市街地。城跡にはかつて二の丸にあった大書院が復元されており、周辺には江戸時代から受け継がれてきた武家屋敷や商家をはじめとする歴史ある町並みが残る。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝

受け継がれてきた
伝統文化を未来に
残すためのブランド化

兵庫県東部の丹波篠山市は、北は京都府に面し、南は大阪府に接した人口約四万一〇〇〇人の自治体だ。中心となる市街地は、ぐるりとなだらかな山に囲まれた篠山盆地に位置する。

時をさかのほれば、一五七九年（天正七）には明智光秀が難攻不落といわれた八上城を落とした丹波攻略の舞台に。その後の一六〇九年（慶長十四）、大坂城と西



明智光秀により落城した八上城の城跡は、国指定史跡。丹波篠山城跡の東、標高462mの高城山に築かれた。
(写真提供：丹波篠山市)

日本の大名を抑えるため徳川家康の命で松平康重が篠山城を築き、一七四八年（寛延元）以降は城の主が青山家に代わって明治維新に至った。

篠山城跡を中心に、かつての城下町には趣のある町並みが今も残り、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。その周辺には牧歌的な田園風景が広がるが、都市圏からは近いんですと話すのは、二〇〇七年から市長を務める酒井隆明氏だ。



「コロナ禍のなか、『より安心して住めるのは地方だ』と皆さんが思うようになったのか、空き家や移住に関する問い合わせが増えています」と話す市長の酒井隆明氏。

「丹波篠山は田舎の代名詞のよ
うな地域ですが、大阪、神戸、京都から車で一時間程度。交通の利便性は高いんです。とはいえ、都市の影響を受け過ぎるとまちが本来持っている個性を保つのが難しくなります。地域の魅力を残し、生かしていきたいというのが、市長就任当初からの私の強い思いです」

そのために酒井氏が力を注いだのは、地域資産のブランド化だ。産業の要である農業は、二〇〇九年に「丹波篠山農都宣言」を行い、二〇一四年には農業振興への取り組みを明確にする「篠山市農都創造条例」を制定。二〇二〇



上／重要伝統的建造物群保存地区に指定された「河原町妻入商家群」。中／篠山城跡の西側、十数棟の武家屋敷が残る「御徒土町武家屋敷群」。下／篠山藩主青山家家臣の住居跡「武家屋敷安間家史料館」。



下／文政年間（1818～1830）の将軍上覧大相撲で連戦連勝したとの言い伝えが残る、王地山平左衛門を祀る「王地山平左衛門稲荷神社」。合格成就の神としても知られる。



上／1944年に火災で焼失した篠山城大書院を2000年に復元。丹波篠山の歴史的資料や、戦国時代の武将の甲冑を模した展示が見られる。

（注）ユネスコ（国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization U.N.E.S.C.O.）：諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関。

年七月には日本農業遺産の申請が行われ、登録が待たれる。

文化的資産としては、二〇一五年に「丹波篠山デカンシヨ節」民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶」が日本遺産に選定。同年末にはまちの景観、農村文化、丹波焼をはじめとする伝統産業などに焦点を当て、クラフト&フォークアート分野でユネスコ（注）の創

造都市ネットワークに加盟した。

もともと一帯は一九九九年に篠山町、西紀町、丹南町、今田町の旧多紀郡四町が合併して誕生した篠山市だったが、「丹波」ブランド強化のための市名変更に関する住民投票を経て、二〇一九年五月に丹波篠山市としてスタートをきったばかりだ。

「豊かな自然や農産物、歴史文化は丹波篠山の誇るべき資産です。しかし『丹波』という名を冠していないことで、当市のブランド力が高まらず、そうした資産を生かすきれない一因になっていました。市名変更により、丹波篠山という地とその誇りを守りたかつたんです。また、日本遺産認定やユネスコ創造都市ネットワーク加盟などを進めることで、丹波篠山にはこれだけのよいものがあるとの証をいただきました。もちろん市民の方の気持ちや行動がすぐに変わるわけではありませんが、地道な地域のブランド力強化を積み重ねることが、まちが未来に続き、住んでいる方が地元の魅力を認識することに繋がっていくと考えられています」

春日神社の絵馬殿では、その昔奉納された貴重な絵馬を公開。下中央は篠山藩主松平忠国が一六四九年（慶安二）に奉納し、狩野尚信の筆といわれる黒神馬。



奈良時代後期の創建といわれる春日神社。境内には篠山藩主青山忠良が1861年（文久元）に寄進した能舞台（国の重要文化財）があり、現在も奉納能が行われている。（写真提供：丹波篠山市）

丹波篠山の名を 広めたのは生産者と 地域を思う黒豆販売

酒井氏が話すまちの魅力の代表格が、全国的に知られる「丹波黒」こと高級品の黒大豆だ。黒豆の栽培は江戸時代から行われていたが、創業一七三四年（享保十九）で当時金物商だった小田垣商店が一八六八年（明治元）に種物店へと転業し、黒豆の栽培を広く地域に浸透させた。やがて大粒でほっこりとしたそのうまさは徐々に口コミで広がっていった。そう歴史

を語るのには、現在では丹波黒の販売が柱となった小田垣商店代表取締役社長の小田垣昇氏だ。

内陸性気候の丹波篠山では朝晩が涼しく日中は温暖と、黒豆栽培に適した気温差がある。また十一月に出る霧は、黒豆をゆつくりと乾燥させていくそう。通常の黒豆が種まきから収穫までほとんど機械作業なのに対し、丹波黒は今でも多くが手作業。それゆえに風土に加え、真面目で朴訥な丹波の人の力が、丹波黒を作るのに欠かせないと小田垣氏は語る。

「普通の黒豆に比べて丹波黒は十倍近い労力がかかりますが、全



収穫された丹波黒はすべて、人の手と目で選別される。



上／小田垣商店が一九八四年に発売を始めた、丹波黒の枝豆も最近人気が高いと話す代表取締役の小田垣昇氏。実りの時期は、枝豆目当てで市外からも多くの人が訪れるという。



国の登録有形文化財に指定された店舗は江戸期の建築。
(写真提供：丹波篠山市)

国的な高い評価と、発祥の地である誇りが生産者の支えになっています。お客さまにいいものをお届けするには、生産者にいい黒豆をつくってもらわなくてはなりません。そのために栽培方法を研究し、その情報を共有するなど、生産者を大事にしたいの思いは、これまでもこれからも変わらない我々の理念です」

加えて小田垣商店では代々、地域への貢献に重きが置かれてきた。黒豆の出荷の際には社名ではなく、丹波篠山の名を前面にアピールすることに努めたそうだ。

国の登録有形文化財に指定された一〇件の建物を、二〇二一年四月にカフェを併設して改装オープンするのもまた、その思いを受け継いでのこと。丹波黒を使ったスイーツの提供に加え、丹波焼や地酒など特産品の販売を行い、地域の魅力を多様に発信する場にしたとか。さらには文化活動など幅広い展開によって訪れる人の層を広げ、その流れを地域に環流できればと小田垣氏は力を込めて話す。「黒豆といえればおせち料理だけ

というイメージを変えたいですね。たんぱく質を豊富に含む上、黒い皮の成分であるアントシアニンには抗酸化作用があります。普段の料理に取り入れていただき、新しい黒豆文化をつくりたいと思っています」

将来的には、国内のみならず、展示会などで高い評価を得たアジアや欧州各国も見据える。丹波篠山の名はやがて、海を越えて広まっていくのかもしれない。

丹波篠山の人と文化の魅力を伝える デカンショ祭

日本遺産「丹波篠山デカンショ節」民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶」に選ばれたデカンショ節もまた、丹波篠山を語る上で欠かせない存在だ。

デカンショデカンショで
半年暮らす

あとの半年寝て暮らす

「代表的なこの歌詞をはじめ、丹波篠山の風土、歴史、人情、暮らしなどを表したのがデカンショ節。江戸時代に各集落で歌われて

いた、『みつ節』が源だといわれています」と話すのは、兵庫県丹波篠山デカンショ節保存会会長の吉田浩明氏だ。

一九八八年（明治三十一）、東京に遊学中だった丹波篠山の若者たちが房州八幡浜（現在の千葉県館山市）へ避暑に訪れ、デカンショ節を歌っていたところ、旧制第一高等学校（現東京大学）の学生が気に入り、学生歌として一世を風靡^び。全国に知られるようになった。毎年八月十五、十六日には篠山城跡で「丹波篠山デカンショ祭」が開催され、一晩で約五万人もの観光客が訪れるほどにぎわうが、時代に合わせ祭りの形が変化しているのが面白い。

かつては町内会ごとに連を組

毎年8月15、16日に行われる「丹波篠山デカンショ祭」。
(写真提供：丹波篠山市)



デカンショ節保存会会長の吉田浩明氏が立つのは、デカンショ節の歴史をたどる映像などを展示する「丹波篠山デカンショ館」。篠山藩主青山家別邸を活用した「青山歴史村」内にある。



み、まちを練り歩いて会場に向かったが、人口減によりそれが難しくなった今は観光客の参加を奨励。祭りの要である、やぐら上のステージまで広く観光客に開放される。祭りの日程も、お盆に合わせるようになった。

「踊りも少しずつ変わっています。歌い手が変われば、節回しも微妙に変化する。本来、民謡とはそういうもの。骨格は守りつつ、時代に合うように変えていくのが大事だと思っています」

歌い継がれてきたデカンショ節は現在、三〇〇以上も数えられるが、祭りの際には毎年「デカンショ



800年以上の歴史を誇る丹波焼もまた、この地の文化を語る上で欠かせない。1895年につくられた現存する最古の登窯は、兵庫県の県指定重要有形民俗文化財に指定。
(写真提供：丹波篠山市)

節大賞」を募集し、丹波篠山を描いたあらたな歌が生まれている。とはいえ、後継者の育成は今後の課題であり、デカンショ節保存会では小中学校をまわり、歌や楽器の演奏を体験できる「デカンショ楽習」を実施していると吉田氏は話す。

「この地で育った子どもたちが大きくなってどこへ行ったとしても、デカンショ節を通して、丹波篠山を思い出してくれたら結構なことではないかと思うんです」

空いた古民家を 宿に再生し元気を 取り戻した限界集落

のどかな農村地域では、あらたな取り組みが注目を浴びている。築約一五〇年の古民家二棟を活用



し、二〇〇九年に開業した宿「集落丸山」だ。開業前は、一二棟の住宅のうち七棟が空き家。五棟に住民一九人という限界、いや消滅寸前集落だったと、NPO法人集落丸山理事長の佐古田直實氏は振り返る。

「危機感がありました。でも、私たちは何の力もなく、田舎者で我慢強けだけが取り柄。困ったなどは思いつつも、解決のすべを知らなかった」

転機は古民家活用により地域創生を進めていた、一般社団法人ノオトがこの集落に着目したことで訪れた。住民に有識者や学生たちを交えた話し合いを何度も行い、集落の将来像を議論した。住民全員が参加したNPO法人とノオトが連携した有限責任事業組合「丸山プロジェクト」を組織し、空き家をリフォームした宿の運営が始まった。

訪れた宿泊客は鳥のさえずりや川の水音など、なにげないことに感動し、ゆっくり過ごして癒やされる。その魅力は口コミで広がり、リピーターは少なくないとか。コロナ禍以降、客足が以前にも増し

「我々は地域資産の良さをないがしろにしてきたのだと、都会から来た方々に教えられました」と語るNPO法人集落丸山理事長の佐古田直實氏。



左／宿泊施設の古民家は水回りを含めてリフォームが施されつつも、暮らしのやさしい名残が程よく残されたつくり。下／のどかな農村風景が守られた集落丸山。



て伸びているのが興味深い。

事業の成功はもちろん、住民の意識の変化がうれしいと佐古田氏という。

「都会の方から、自分たちの住んでいる土地に普通にあるものの良さをたくさん学びました。お客さまの声に励まされ、来てくださる方に喜んでもらおうと、生け花が得意な女性が集落にある野花を使って宿に花を生けたり、外来種の草花を刈ったりするなど、住民一人ひとりがどう貢献するかという、意識が高まりました。消滅しかけていた集落がこの宿のおかげでよみがえったんです」

現在は古民家や限界集落再生のロールモデルとして、全国各地から視察に訪れる人が絶えない。

「細く長く続けられればと思っ
ています。一〇年先を考え、宿の
運営を、実行力があり、この環境
を生かしてもらえる若い世代に引
き継いでいきたいですね」

実際、学生ボランティアの受け
入れ、里山整備をはじめとする環
境保全活動、耕作放棄地の田んぼ
オーナー制度など、宿泊以外の展
開や外部との交流が積極的に行わ
れているという。

「最近、集落の広場で、寝転んで
星空を見るようになりました。今
までそんなことをしようと考えた
こともなかったのですが、お客さ
まから星がすごいですねと言われ
て……」

照れくさそうに笑う佐古田氏の
表情と、人の言葉を真摯に受けと
める謙虚な姿勢が印象的だった。

**あらたな特産品づくりを
目指す農業移住者の
チャレンジ**

豊かな自然環境は都市部の人々
を魅了し、移住者も少しずつ増え
ている。丹波篠山市東端に位置す
る福住地区^{ふくすま}で農業を営む^{キヤトル}、「quatre

「フェルム
ferme」代表の森田耕司氏もその
ひとりだ。

神戸市で移動式の生花店を営ん
でいた森田氏は、お子さんのアレ
ルギー対策のため丹波篠山市から
無農薬野菜を取り寄せていたのが
縁で、二〇一二年に移住。農業は
まったくの初心者だったが、農家
で研修できる兵庫県の制度を利用
して転進を図る。目指したのは、
有機農業、無農薬栽培だ。

「移住や、有機・無農薬の農業は
周囲の農業従事者と軋轢を生むと
もいわれますが、私はそうしたこ
とは全く無縁でした。高齢化で

手が回らなくなった耕作放棄地を
借り受けたところ、うちもうちも
と依頼が次第に増え、耕作地は当
初の二ヘクタールから七ヘクター
ルに広がりました」

移住時、米や黒豆を中心に栽培
を進めていた森田氏が現在、多く
を手がけているのは和綿だ。イノ
シシや鹿などの獣害の影響を受け
ないための苦肉の策だったが、耕
作地が広がるうち、国内最大の和
綿生産者に。主な取引先のアパレ
ルメーカーが事業を中止する困難



上／黒豆一〇〇%のハンバグなどほ
かにはないメニューをカフェで提供し、
黒豆のあらたな調理法を提案していき
たいと話す「quatre ferme」の森田耕
司氏。右／和綿を使ったストールと布
団。天然の綿には遠赤外線効果があり、
少量でも保温性に優れているという。

第9代開化天皇の孫が埋葬されたといわれる
全長140mの「雲部車塚古墳」。

(写真提供：丹波篠山市)



にみまわれたものの、ストールほかオリジナル商品の製品化が進行中だ。

「今後は耕作地を預かるのではなく、農地所有者の方に和綿栽培へと転換してもらおうとも考えています。和綿が丹波篠山市の未来の特産物になるよう、行政とも話し合いを重ねているところです」

二〇二〇年十月には、古民家をリフォームした、軽食も提供するカフェを開業。



上／黒豆とともに地域の名を全国に知らしめた丹波栗は、大粒でしっかりした甘味がある。下／昼夜の寒暖差がある気候は米の栽培に適しており、コシヒカリを中心とした丹波篠山米は「東の魚沼、西の丹波篠山」と高い評価を得ている。

(写真提供：丹波篠山市)

「農作物は直売であっても、利益率が低い。うちの作物を使うカフェでは、飲食スペースに加えて、加工食品や綿製品も販売するなどして、商売ベースで農業が成り立つサイクルをつくりたいと考えています。また農業体験する方がゆつくりできるようにして、農業を軸に人が集まる仕掛けも思っています」

将来的にはブルーベリーの観光農園や宿泊施設を、と実に楽しんで語る森田氏からは移住生活の充実ぶりが伝わってきた。

まちの人々の意識を変える移住者や若い世代の活動

福住地区であらたな暮らしやビジネスを始めた移住者は、森田氏だけではない。重要伝統的建造物

群保存地区に含まれた集落の通り沿いにはカフェやイタリアンレストランなど洒落た店が点在し、週末ともなれば他府県ナンバーの車が行き交う。

「朝は鳥の声で目覚め、夜はカエルの声が聞こえる。あの世この世か分からなくなるくらい、幸せなところですよ」

福住地区に移住した人が喜びをこう表現したのを、市長の酒井氏は聞いたことがあるそうだ。

今回の取材でお会いした丹波篠山の方々には共通して、鷹揚おうようでやわらかな印象があり、それが独自の気質だとも伺った。四方をなだらかな山に囲まれた美しい景色、そのやさしい眺めのなかで時間はゆつくり流れ、人の心は急かされないのかもしれない。

また当市が神戸大学との連携で行った「丹波篠山市農村イノベーションラボ」も、変化をもたらす存在に。市内各所で農業実習が行われるなか、ボランティアサークルが生まれ、都会の学生たちが積極的に高齢者のもとを訪れるようになったとか。そうした学生がそのまま移住して地域おこし協力隊

に参加し、丹波篠山に根づく例もある、と酒井氏は顔を綻ばせた。
二〇二〇年の丹波篠山デカンショ祭は中止になったが、代わりにオンラインで行われた「一五時間オンラインデカンショ」は、約三万件のアクセスを数えたという。遠く離れた場所でデカンショ節を耳にした人たちはそれぞれに、丹波篠山へと思いを寄せたに違いない。



訪れた人の心にやさしく響く、丹波篠山の田園風景。